

「木は地球を救う」 — 9

細田木材工業(株)
相談役 細田 安治

日本列島フライパン

気象庁が早々に梅雨明け宣言を出した。梅雨明けは有り難いが、この夏は暑さが厳しく、しかも長く、暑さに負けぬよう気をつけねばと覚悟していた。

案の定、連日体温を越えるような40度の暑さが続き、各地で観測史上初めてと言われ、熱中症患者が続出し亡くなる方が出るほどの猛暑？を通り越した酷暑が連日続いた。日本列島はフライパンのようだ。

西日本豪雨被害・12号迷走台風

6月の終わりから、西日本岡山、広島を中心とした豪雨が降り、四国愛媛、長野、岐阜地域など列島各地に甚大な被害が発生した。豪雨に対する従来の受け止め方、考え方、即ち雨に対する常識、認識を変えるほど強烈なことであった。

河川が溢れて街が池に変わり、土砂崩れで家が潰され、道路は寸断、多くの犠牲者が発生した。

加えて12号が迷走、東進した台風は、八丈島で向きを変え西に進み、紀伊半島から瀬戸内海を襲い、豪雨被害地の西日本、岡山広島を襲い、九州の南で再び向きを東に変え、丸を画くように、また西に変えた。こんな台風は気象庁でも経験がないと何度も発表、全く予測できないため、嚴重な注意を呼び掛けるのが精いっぱいであった。再三にわたる「水の被害」に遭われた地域の方々には、なんとお見舞い申し上げます。ただお気の毒と申し上げるほか言葉が無い。心より御見舞い申し上げます、一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

過去にない豪雨

これまでに経験したことのない集中豪雨が、長時間にわたり降り続いたことが最大の原因とすることは、誰もが認めることだと思う。

しからば、何故このような豪雨が発生したのか。一言で言えば、便利さの極限への追求による地球温暖化が原因の一つではないか。

森は悪者か

豪雨被害の度に報道されるのは、大雨により山が崩れ、土砂と一緒に木が押し流され住宅を潰し、道路を寸断、橋を落とし、河川の流れを止め、水を溢れさせ洪水を発生させ、流れてきた木が被害を大きくしている。とテレビで繰り返し放映されている。濁流を流れてきた木は丸裸にされ、悪者扱いにされている。木が気の毒でならない。木材屋の身びいきだろうか。木が悪者にされる。木材屋として、何故こんなことを言われなくてはならないのか？

列島の4分の1は針葉樹人工林

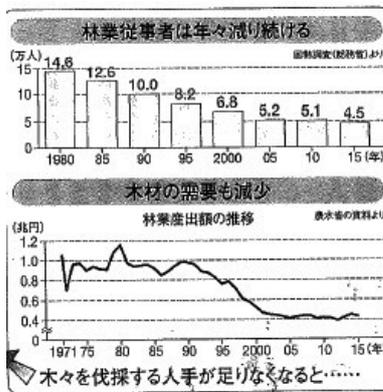
保水力が足りないのは間伐が十分に行き届いていないからだ。世界第2位の森林国である日本列島の森林面積は、国土のおよそ3分の2にあたる2,500万ヘクタール。うち人工林は41%の1,029万ヘクタール。残りの51%即ち1,479万ヘクタールが天然林である。人工林が多いのは戦後国策として植林が進められ建築資材として、成長の早い針葉樹即ち杉44%、檜25%、唐松10%を占めている。

間伐せず放置

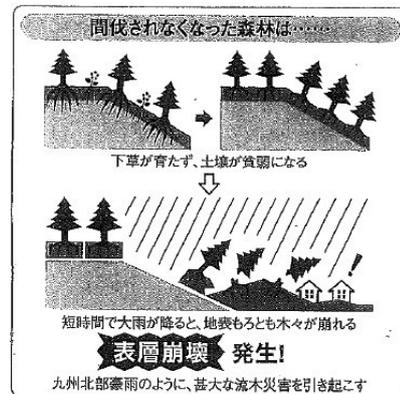
人工林では、一定の面積内に多くの植林を行うため、数年ごとに間伐を繰り返し、適正な数量の木を育てている。間伐せずに放置すると、木が込み合って太陽光線が差し込まず下草が育たない。落ち葉や下草から栄養分を含む土壌が作られて、木の足もとを固め、根を張り巡らし水を保つ土が作られる。これで保水力がある土が作られる。

根元むき出し根こそぎ流される

間伐をしなければ、ヒョロヒョロした弱い木ばかりの貧弱な森になる。太陽が差し込まなければ、雨は地面に吸い込まず、土を押し流すことになる。足もとの土が流された木は、根元がむき出しとなり、立っているのがやっとのありさまだ。そこへ今回のような、観測史上経験のない大雨が長時間にわたって降り続けば、たちまち根こそぎ流されるのは自明の理だ。間伐、手入れを怠ってきたツケが回ってきた。なぜできない。ここもご多聞に漏れず林業従事者の高齢化による人手不足が原因である。



林業従事者が減少すると
参照 河合雅司 未来の年表より P168



間伐されなくなった森林は
参照 河合雅司 未来の年表より p169

豪雨被害の原因

豪雨被害の原因は、いくつもありこれと言ったものはない。しかし気が付いた原因を列挙すれば

1. 地球温暖化による地球環境の変化
2. 無計画な開発
3. 森林の手入れ
4. 林業従事者の高齢化

これらの対策も一筋縄ではいかぬ。

政府は、民有林の整備に使う新税、「森林環境税」を2024年度から導入する。間伐できない所有者から、

市町村が管理を受託し、やる気のある事業者に貸し出す「森林バンク」制度を整備する方針だ。

安倍総理大臣も、災害対策として、予備費から約百億円を支出すると表明したが、こんなことではとても間に合わぬ。

我々木材屋が、「木を使ってもらう活動」をもっともっと続けることが、災害から日本列島を救い、ひいては、地球を救うことに繋がる。木材屋は奮起せねばならない。

山崩れは高地にない

筆者は7月の中旬「祇園祭り」見物のため京都を訪問した。大雨の谷間にあたり見物を楽しむことができた。友人の案内で嵐山から皇太子・同妃殿下「ご展望所」がある亀山峠から北山杉の産地北山までを視察した。

桂川の増水で観月橋まで冠水し水位は、平成23年の洪水被害時まで迫ったが、辛うじて堤防を越えることなく、食い止めることができた。

前回の教訓で堤防を強化したおかげと聞いた。問題は亀山峠から眺めてみると、目の前の山々には、山崩れがほとんど見られない。部分的に小規模に崩れているところはあるが、これは、人間に例えれば「禿」の範囲にとどまるごく小規模なもの、今回の豪雨に関係ない箇所だ。この地域に限らず、山の頂上から、森の深い中腹に至る緑豊かな「活き活き」、「ふさふさ」した森林に山崩れはない。この地域に限らず、東京から京都まで新幹線沿線の山々には、山崩れは殆ど見られなかった。

問題は、川の流れに沿って道路が走り、住宅の裏山まで山が迫る。こんな地域が更に上へ上へと開発が進む。木が倒され掘り返されて家が建つ。このような地域は森そのものを開発のため削り家を建てる。更に高い地の山々には貧弱な木しかない。この貧弱で僅かな木の森は、保水力がなく大雨が増えれば、ひとたまりもなく地滑りから土砂崩れが発生し大きな被害をもたらす。自然を無節操に開発を進めすぎた報いだ。地球が怒っている。



京都亀山峠 皇太子・妃両殿下御展望所
細田安治撮影

続く

◆木を組む 日本青壮年団体連合会

カレンダー 8月より

コンッ・・・コンッ・・・コンッ。掛矢(かけや)の音が街に響き渡る。その様子を、誇らしげな顔をしたご主人が見上げている。今日は大安吉日、上棟の日。危険な作業に注意を払いながら、大工さんが息を合わせる。何十本もの木材が、まるで魔法にかかったかのように組み合わされていく。一本一本の木材が、大工さんたちの顔が、キラキラと光る。



日本青壮年団体連合のカレンダーより